

2017年12月31日 礼拝メッセージ

聖書：イザヤ書 11 章 1～5 節

説教：正義と真実によって

1 私たちはどこに向かっているのか

今年最後の礼拝となりました。この一年はみなさんにとってどんな年だったでしょうか。

伝道者の書 12 章 1 節にこうあります。「あなたの若い日にあなたの創造者を覚えよ。わがわいの日が来ないうちに、また『何の喜びもない』という年月が近づく前に。」

人の一生の中で「わがわい」と呼ぶような大変なことは滅多に起きるものではありません。わがわいは、ある日突然、思いがけなく向こうからやって来る。そんなふうに乗っています。けれども聖書によれば、「わがわい」とは突然来るものばかりではない。「何の喜びもない」とため息とともに口から出るとき。それが私たちにとって、大きなわがわいの日なのだと思います。

現役のときは仕事に生き甲斐を感じてばかり働いていたとしても、退職し、だんだん人生の終わりが見えてくると、「何の喜びもない」と言う方もいるでしょう。あるいは若い方でも、仕事や人間関係で強いストレスを受けると、「何をしても楽しくない。」「気分が落ち込んで何もする気が起きない。」そういうこともあります。あるいは大きな失敗をしたり迷惑をかけたり、もう自分の人生は終わりだと思うくらい、どん底に突き落とされることもあるでしょう。それらはすべて聖書では、「わがわいの日」だということになる。いったいどうしたらよいのでしょうか。

よく「人生をリセットしたい」と言うをしますが、それができたらだれも苦労しない。

とにかくいまいる道を歩んでいかなければならない。いったいこの道はどこに続いているのか。墓場で終わり、なのか。それとも別の所にあるのか。今日の礼拝と明日の新年礼拝の二回に分けてイザヤ書を開きながら考えていきます

2 エッサイの根株から出る方

1) イエス・キリスト

1 節を読みます。「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」

聖書の中で、エッサイの名前が最初に登場するのは、第一サムエル記 16 章 1 節です。エッサイはベツレヘムに住んでいるダビデの父親でありました。祭司サムエルが、サウルに代わるイスラエルの王を捜しに出かけたとき、このエッサイの家を訪ね、ダビデを見いだして、頭に油を注ぐ。そんな場面です。

このことから、「エッサイの根株から新芽が生え」というのは、直接にはダビデのことだろうと思うわけです。ところが一つ問題がある。イザヤは、ダビデが活躍した頃から二百年以上あとの時代の人です。あとの時代の人が、エッサイの所にこれからダビデが生まれると語るのは辻褄が合いません。そうしますと、これはダビデのことを指しているのではなく、ダビデの子孫のことを言っていることになる。それはだれのことか。イザヤの時代からおよそ八百年後に、ダビデの子孫としてベツレヘムで生まれたイエス・キリストのことをイザヤは言っています。

2) 主を恐れることを喜ぶ

エッセイの根株から出た新芽はどんな方か。いろいろありますが、3節の前半に目を留めましょう。「この方は主を恐れることを喜(ぶ)。」

恐れるということばは、恐怖とかぶるぶる震えるような怖さを思い浮かべるので、恐れることがどうして喜びなのかと不思議に思うかもしれません。

例えばこう考えてみたらどうでしょう。オーケストラはいろいろな楽器奏者が集まり、指揮者の指示に従って一つの作品を演奏します。当たり前のことですが、指揮者が恐ろしいわけではない。指揮者を信頼し、尊敬するから、演奏者は指揮者の棒に従います。そうしてすばらしい演奏ができると、指揮者も演奏者も手を取り合って喜ぶわけです。

「主を恐れることを喜ぶ」は、これとよく似ているように思います。

3) 見えるもの、聞こえるものではなく

その方が何をなさるのか。それが3節の後半にあります。「その目の見るところによつてさばかず、その耳の聞くところによつて判決を下さず。」

私たちは目で見えることや耳で聞こえることが、この世界のすべてであるところかと思つています。最近、町のあちこちに防犯カメラが設置されています。何か事件が起きると、映像に映っていないか確認します。あるいは、重要な会議のやりとりを録音しておき、あとで食い違いが起これば、その録音テープが証拠に使われます。目で見えるもの、耳で聞こえるものこそが、真実を判断するよりどころであるとだれもが信じています。

しかしこの方は違う。この世界は目に見えるものだけで造られているのではない。この

世界は耳に聞こえるものだけで造られているのではない。いや、目に見えないところ、耳で聞こえないところにこそ真理があると考えます。裁判所でこんなことを申し立ててもおそらく証拠として取り上げられることはないでしょう。しかし、神である方は違います。

でもいったい、目に見えないこと、耳で聞こえないこととはなにか。そんなものはあるのか。実は私たちはよく知っている。皆さんには心があるはず。心で何をつぶやいているのか、ほかの人はだれもわからない。目には見えないし、耳では聞こえません。だから「ありません」とだれも言わない。みな、あることを認めています。

3 正義と真実によつて

1) 貧しい者と悪者

こう言うと、こんな不満が聞こえてきそうです。「神は私たちの心の中に盗聴器や隠しカメラがしかけ、なんでもかんでもさばこうとしているのか。そんな神は嫌いだ。」もしそうなら、私も嫌いです。息がつかなくてやりきれません。もちろんそんなことではないはず。神がどのような方であるかは、次の4、5節から明らかになっていきます。「正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの行きで悪者を殺す。正義はその腰の帯となり、真実はその胸の帯となる。」

「さばく」と聞くと、地獄に落とされるのか、ひどく苦しい罰を受けると連想します。もちろんそういう面もあります。でも、よい意味もある。例えば「大岡さばき」という言い方もあつて、悪者からひどい扱いを受けて

困っていた人たちが、正しく認められ、地位や名誉を回復していく。そのようなことも「さばぎ」と言います。

神はどのような者に目を留めておられるのか。イザヤははっきりと記します。「寄るべのない者」、「貧しい者」とあります。いったいだれのことか。とりあえず、家族や友達がいるので、自分は「寄るべのない者」には入らないのか。とりあえず、食べるに困らない生活を送っているので、自分は「貧しい者」ではないのか。

先ほど言いました。神は目に見えるものや耳に聞こえる者だけを見るからではない。目には家族がいたとしても、この世界に自分を理解してくれる人がいなかったなら、その人は「寄るべのない者」になるのではないですか。人の目にはたくさんの金があり、何不自由な生活ができてるように見えても、心の中で「私は本当に大切なものを持っていない」と悲しんでいたら、その人は貧しい人にならないですか。

神は目に見えないところをご覧になります。だれにも気付かれずにひっそりと苦しんでいる者、悩んでいる者を捜し出します。そしてそのような者を必ずさばくと言われます。苦しむ者が喜ぶ者になる。私には大切なものがないと言って泣いている者に、朽ちることのない大切な宝を与えるというのです。

この世を見れば、どこに正義があるのかと思います。どこに真実があるのかと憤ります。もちろん、銃弾が飛び交うような紛争地帯や、劣悪な衛生状態の難民キャンプ、そんな大変な所に出かけて正義と真実のためにいのちをかけて努力している方もいます。

しかし政治や社会を見るならどうか。軍事力とか権力とかそのような力が神のように

あがめられています。お金こそ力であると、まるで神のように崇拝されています。いっばう、正義と真実はいとも簡単にねじ曲げられています。嘘でも百回大声で繰り返せばそれが真実だと堂々とと言われる時代になりました。このまま行ったらいったいどうなるのだろうか。多くの方は言いしれぬ不安を感じています。それでも私たちはこの罪の世界を生きなければなりません。

2) 「その日」(10 節)

昨日の続きがきょうであるように、今日の続きとして明日があるだろう。どうせ何も変わらないと、人々はどこかであきらめかけています。しかし、聖書は違う。10 節に「その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所には栄光に輝く」とあります。

エッサイの根である救い主キリストが、この罪の世を完全にさばく日がやって来きます。闇に隠されていたものは、すべて光の中に引きずり出され、悪者は打ち砕かれ、寄るべのない者、貧しい者は、名誉が回復されていく。「その日」と言われるときこそが、私たちのゴールです。私たちは今そこへ向かって一步一步進んでいる。もちろんその日がいっつであるのか誰もわかりません。しかし、必ず来ることがわかっています。

この一年を振り返るとき、どこを見るのか。目に見えるところばかりを見れば、よいことは何もなかったと嘆くかも知れません。しかし、神はどこをご覧になっていたのか。目に見える所ではなかった。目には見えないところをご覧になっている。であれば私たちも霊の目で見たらどうだろうか。何も恵みはないと思っていたけれど、実は豊かに主から恵み

をいただいていたのではないか。この世の騒々しさにかき消されてなにも聞こえいとおもっていたけれど、静まってよく耳を澄ますなら、神の励ましは豊かに語られていたのではないか。

今年一年の恵みを数え、また新しい年を迎えたいと願います。